

稱讃 二一七号

二〇二二年一月二日発行

謹んで 新春のお慶びを申しあげます。とともにCOVID19
により お慎みの営みのなか お見舞い申しあげます。

目出度さも らう位也 おらが春

『稱讃』先年末号（二一六号）に引き続き小林一茶氏の俳句です。

この句は、一茶氏の没後、『おらが春』の巻頭に掲載され、「ともかくもあなた任せのとしの暮」が巻末に掲載されております。『おらが春』は、先に長男を亡くしておりますが、長女が生まれて、三人で仲睦まじく、質素に暮す新しい年を迎えた日から、その六月頃、愛おしい長女が亡くなり悲しみの癒えない中で的一年間を悲喜交々とした出来事を記しながら、詠んだ俳句が掲載されております。

「目出度さも ちう位也 おらが春」の前文でも、一茶は、「おれらの俗人は世俗の塵に埋もれて生きる境界に身を置きながら、鶴や亀になぞらえて祝いの限りを尽す

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com



のも、大晦日にやってくる厄払いの旅芸の挨拶のように胡散臭く思うから、空っ風が吹けば飛ぶようなあばら屋は、あばら屋に相応しいように、門松は立てず、煤も払わず、どうかこうにか今年の正月もあなた任せ 阿弥陀さま任せ に迎えたことよ。

現代語訳」と記しております。

あなた任せ」は、ともかくもあなた任せのとしの暮」でも著わしています。一茶氏はこの一年、生涯を阿弥陀さまのご本願をいただきつづけられ、南無阿弥陀仏」のお念仏を相続しておられたのでしよう。

ちう位」とは、信州の方言では、いい加減」という言葉だそうです。

今年の正月は、昨年からのCOVID19の感染拡大の予防のため、カウントダウンも、初詣も自粛され、ドンチャン騒ぎしない、静かな新年であります。そう言う意味からすれば、新年を迎えることは嬉しいことではあります。が、歓喜」身によるこび、こころによるこぶ」とまでは心情的になれない、世間的にも 中ぐらい」のお祝いムードであります。

ではあります。が、たとえ一人きりであっても、悲しいときも、嬉しいときも、必ずいつも阿弥陀さまがお側に居てくださっていると思っていかけた小林一茶氏のような方々がいらっしやることに、あらためて感謝するご縁をいただいた新年であります。

稱讃寺

宗祖親鸞聖人 報恩講

厳修いたしました。

日時 十二月十三日 日 十二時半



ソーシャルディスタンスを取りましたので、8席しかありません。それでも空席がありました。

お天気にも恵まれました、当寺の宗祖親鸞聖人の報恩講さんを、今年も厳修することができました。ご案内では、午前十時から午後十二時半からの二座おとめする予定でありました。

み仏に抱かれて」を歌い、解散となりました。この度のお供えのお飾りには、切り餅をスーパで購入し、それを積み上げたものになりました。その余りをお供えに、お渡しするつもりで祖師前にお供えしておりましたが、みなさんがお帰りになってから、お渡しするのをわすれておることに、気づきました。これから晦日、大晦日を、そして、新たな年をお迎えします。どちら様も、ご慈愛のうえ、阿弥陀さまと、親鸞聖人と共に過ごしてください。

朝から準備をしていたのですが、十時になってしまふ、お扱いを個々にまとめてない、受付の準備が間に合わないと思っていたところ、前田さんご夫妻がお訪ねになりました。十時を少し回ったところで、他の方がお見えでないの、前田さまから、午後から参りましょうかとおっしゃってくださいました。住職はその言葉に甘えて、そうしていただきたいということでホッとしたことです。

お陰様で、十分な時間をいただき、お昼前には、準備万端整えることが出来ました。正午を過ぎた頃、お約束通り、前田直樹さん久美子さんご夫妻がお出でくださいました。それに引き続き、細川研一さん、小池優子さん、中木原乃既子さん、高橋八重子さんがご参拝くださいました。

午前中におとめする予定でありました宗祖讃仰作法」をおとめして、御俗姓」を拝読して、事前にお送りしていた 親鸞聖人を知ろう」の穴埋め問題の解答をしながら、お話をさせていただきました。

一時間ほどで、法要を終わらせていただき、

親鸞聖人は、一人居て 喜ばば 二人と思うべし 二人居て 喜ばば 三人と思うべし その一人は 親鸞なり と、仰ってくださいました。どうぞ、このお心を胸に納めていただき、またしお会いできることを楽しみにしていきたいと思えます。

絶対に、感染症が出ないように、万全を期して、お迎えいたしますので、どうぞ、ご安心のうえ、ご参拝ください。



安心しておとめしていただくために揃えました。

○マスク（読経用） ○マウスプレス 声を出しても思わしくないので
○フェイスシールド 顔を覆うため） ○ゴム手袋 経本を手にするため）

二〇二二年 令和三年

『月々のこづば』 表紙のこづば

ねんぶつ

念仏となつて

わたし くち

私の口から

あら

現われて下さる

ほとけ

み仏のはたらき

松野尾潮音師
(一九二一〜一九九九)

念仏申す身となつて

さて、私は表紙のことばを見た時、甲斐和理
子さんのお念仏を喜ぶ二首の和歌、

御仏をよぶわがこゑは御仏の

われをよびます御声なりけり

(覃かご 二四四頁)

みほとけの御名を称ふるわが声は

わがこゑながら尊とかりけり

(同 一八五頁)

が浮かびました。そして、かたじけない

もったいない」という思いが続きました。

彼女の和歌は、前者が二〇一三 平成二十

五)年の九月、後者が二〇一四 平成二十六)年の一月の 法語カレンダー」に採用されています。私は、後者の縁で、忝に響くことば『本願寺出版社』にこれらの歌の味わいを書かせていただいていたので、思い合わせたのでしよう。

念仏」とは、私」の口について出てくる南無阿弥陀仏」という声です。それを 称名」といいますが、それはみ仏が 私」を喚び続けるはたらきなのです。これを 名号」といいます。

称名」と 名号」

浄土真宗では 南無阿弥陀仏」を、 称名」ともいい、 名号」ともいいます。この両者は一見してわかるように、 名」の字の位置が後と前という大きな違いがあります。

さて、インドで成立した経典はもともと主にサンスクリット語で書かれていました。それらの経典が中国に伝来し、紀元前後から多くの方々の苦勞によって、長い年月をかけて漢字に翻訳され続けました。徒歩以外に主な交通手段のない時代、シルクロードを通してインドの僧が中国に伝えたのです。その後、中国の僧がインドに求法の旅をされたのです。そのようにして翻訳に携わった僧を 三蔵法師」と呼びます。その中には国禁を犯してまで仏典を求めた方がいます。それが、玄奘」という三蔵法師です。孫悟空の 西遊記」で知られる玄奘三蔵は実在の人物なのです。そのようにして漢訳された経典が日本にもたらされたのです。

私たち日本人は、本堂やお内仏で勤行する時

に、その漢文を和語として読み下したりします。漢文を和語としてどう読み理解するかで、種々な解釈と味わいが生まれたりします。

漢文では動詞の目的語はその動詞の後に置かれますので、 称名」とは 名を称する こと」と読み下すことができます。一方、 名号」が 名を号する こと」であるならば 名号」となるべきですが、そうなるってはいません。また、この 号」は略字で本来は 號」です。つまり、 號」は 虎」に関わるもので、虎が大声で自分の存在を十方に告げるために吠える様を意図しています。その意味で、 名号」とは名告り主が大声で自己存在を告げている様です。端的に言えば、 名号」とは名告りです。すなわち、阿弥陀如来が十方衆生に、この 私」に、自らの存在を 名」をもって名告り続けているのです。

まあ、 名号」については、伝統的に すべての功德を名に施す 全特施名」といわれます。すなわし、阿弥陀仏においては、その智慧と不二の大悲の 名告り」をもって衆生を 摂め取る こと 摂取不捨」こそが、仏のすべての功德、如来の いのち」をかけた願いであるというのです。それを踏まえた上で、敢えて漢語の 名号」を和語として書き下すならば、私は 名をもつて号す こと」となると味わっています。しかし、阿弥陀仏の 名号」とは単に名を告げることだけではないのです。 名号」こそが私にとっては仏・如来そのものなのです。換言すれば、 私」の口にこぼれる 南無阿弥陀仏」の念仏こそ、 私」の いのち」に寄り添う如来の願いそのものなのです。さて、私たちは自分の親を おかあさん

おとうさん」と呼びます。しかし、どうして私たちはそう呼ぶようになったのでしょうか。それは親の側が、赤ん坊は何もわかっていない、あるいはわからないのを承知の上で、生まれたばかりの「いのち」に向かって、おかあさんよ」「おとうさんよ」と何度も喚びかけずにはおれず、名告り続けていたからでしょう。その名告り、喚びかけが「名号」なのです。その名号は、「ここにいますよ、心配するな」という親心であり、お母さんとよんでくれ」という思いであり、ごんなことがあろうとも見捨てず、必ず育てる」という願いなのです。その願いが「私」に至り届いているからこそ、「私」の声となって「カアカア」「トオトオ」というように、名を称える「ようになるのです」。

時代が激変したとしても、また価値観に断絶を感じて親が子を「〇〇世代」などと評したとしても、この親心、親の願いは変わらないのではないのでしょうか。

ある出来事を通して 申略)

自己を知らされる

さて、お釈迦さまは私たちの生きている世界を「娑婆（サハ）忍土」といわれました。この言葉は、古今東西、どんな制度の上でも人間が構築した社会（器世間）は苦悩を生み出すものであることを意味します。なぜならば、それを作りあげているのが、自己中心的な煩悩をもつ人間（有情世間）だからです。その点を、唯円房が著わしたといわれる『歎異抄』では、

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします

（『註釈版聖典』八五三〜八五四頁）

ということです。親鸞聖人は、自らを「煩惱具足の凡夫」といわれ、そんな自己中心的な「私」が作り上げた世の中は真実ではなく、虚仮不実なのである、と仏・如来に知らされ、告白されているのです。

先の「亡け世代」や「新人類」という表現も、当時の若者たちが他者との関係を嫌い、社会を無視する生き方をしているように見えたからでしょう。しかし、それは、戦前の全体主義や安保闘争への反感や反動だともいえます。身勝手な私たち凡夫は、ややもすると反動によって両極端に揺れてしまいます。そこには、今を生きている自己を見つめる視点が欠落していないでしょうか。悲しいかな、人間は自らを見つめることが苦手なのです。そして、無自覚に、間違っている」のは自分以外の人であり、組織や社会であると決めつけています。

善導大師は『観経疏』「玄義分」で、

これ経教はこれを喩ふるに鏡のごとし。

（『註釈版聖典 七祖篇』三八七頁）

といわれています。経」に顕された仏の教え（佛法）は、「私」を映し出す「鏡」のようなものだといわれているのです。南無阿弥陀仏」という仏の名告りこそが、「私」のあり様を照らし続ける仏陀の「智慧」のはたらきに他

ならないからです。如来の「智慧」のはたらきであり、いつでもどこでも「私」を見放さず寄り添い続ける如来の「慈悲」のはたらきに他ならないからです。如来の「智慧と慈悲」のはたらきのすべてが、南無阿弥陀仏」という名号となって届いています。

今を生きている自らの姿を知らないまま生きるということは、まさに「裸の王様」でしかありません。自らのあり様を知らずして、いかに生きるかを考えても虚しくなるだけではないでしょうか。お念仏申す日暮らしの中に如来の願いを聞き開きつつ、苦悩多い人生であっても如来のご恩を知り、感謝と慶びをもって生き抜かせていただきます。

以上のように、私は表紙のことば「念仏となつて 私の口から 現われて下さる み仏のはたらき」を味わいました。

内藤昭文氏の原文より抜粋)



私たち人間の世界の親子は、迷子になれば子は親がどこに居るか分からないと同時に、親も子がどこに居るか分からない。でも、阿弥陀さまは迷子の私がどこに居ようと、また阿弥陀さまのことをちっとも知らなくても、どんな時でも、私の場所をおわかりで、いつも見てくださいとおられます

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

歎異抄』に語られた親鸞

佐藤 正英 氏

たら、奈良の興福寺や比叡山の延暦寺に学識豊かな官僧がおられますから、そのかたがたにお聞きになるのがよいでしょう。

（歎異抄」第二条）

親鸞は、高ぶってもいないし、激しても

いない。また、自身をことさら貶めても、卑下してもいない。すべての身構えとは無縁に、淡々と語る。そこには類まれな率直さが滲んでい^{にじ}る。親鸞のことばは、唯円を激しく揺り動かし、歎異抄』の端緒がそこに開けた。

唯円^{ゆいえん}がはじめて親鸞に出逢ったのは、東国の門弟に連れられて京に上ったときのことである。親鸞は七十歳で、唯円は念仏者となつて間もない二十一歳であつた。親鸞は、恵信尼^{えしんに}や明信^{みょうしん}と別れ、末娘の覚信尼^{かくしんに}一人を伴い、住み馴れた常陸国稲田^{ひたち いなだ}の草庵をあとにして、七年前に京に戻つていた。

『教行信証』をより十全な述作とするためであつた。

親鸞は、東国の門弟に向かつて、少しのためらいもなく、無造作にこころを開き、つぎのように語りかけた。

「末法の世の非僧非俗の念仏者であるわたしには、つぎの生^{しょう}に西方極楽浄土^{さいほうごくらくじやうど}に往生まれる手だては、南無阿弥陀仏と称えるだけです。

念仏以外の手だてを尋ね知りたいのでし

「南無阿弥陀仏と称えて阿弥陀仏に救つてもらうがいいでしょう」と法然聖人は説かれました。わたしは法然聖人の説かれたところを信じているだけです。

南無阿弥陀仏と称えることが、つぎの生に西方極楽浄土に往生まれる作爲なのか、それとも地獄に墮ちる作爲なのか、凡常な衆生であるわたしは知っていません。

（同右）

のちに、その詳しいわけを、親鸞はつぎのように明かしてくれた、と唯円は伝えている。

「わたしは、善・悪を知りません。なぜなら、阿弥陀仏が善・悪を知っておられるほ

どに十全に善・悪を知っているならば、善・悪を知っているのでしょうか、煩惱愛欲にまみれた凡常な衆生であるわたしは、善・悪を十全に知っていないからです。

（歎異抄」序）

わたしのどのような作爲が善であるのか、あるいは悪であるのかを知っているのは、阿弥陀仏のみである。南無阿弥陀仏と称える作爲が善であるか否かは、凡常な衆生であるわたしには確言することができない。確言できるだけの十全な知をわたしはもっていない。わたしは阿弥陀仏の絶対知を信じ、阿弥陀仏に己れを委ねるだけである、と親鸞はいう。

ことばを継いで、親鸞はつぎのように語った。

「たとえ法然聖人にたぶらかされて、南無阿弥陀仏と称えて、つぎの生に地獄に墮ちたとしても、わたしは後悔しません。

というの、念仏以外の善をとめて作爲し、絶対知を体得して仏となることのできる身が、念仏を称えて地獄に墮ちるというのであれば、たぶらかされたという後悔もあるでしょうが、わたしはどのような善を作爲することもできない身であり、つぎの生には地獄に墮ちるのは必定であるからです。

（歎異抄」第二条）

親鸞が没して翌年の弘長三 (一二六四) 年二月、恵信尼は、越後から覚信尼に宛てた手紙のなかで、つぎのような親鸞のことばを伝えている。

「法然」聖人のわたらせ給はんところには、ひとはいかにも申せ、たとひ惡道にわたらせ給ふべしと申すとも、世々生々にも迷ひければこそありけめ、とまで思ひまゐらす身なれば・・・」

大意：法然聖人がつぎの生に生まれるところであれば、たとえ地獄に堕ちるとひとがいおうとも、どこまでもわたしはついでいきます。わたしは、はるかな前生からずっと煩惱愛欲にまみれた境界に迷ってきた身ですから。」

恵信尼の手紙は、親鸞がことあるごとに、法然にたぶらかされて、つぎの生に地獄に堕ちたとしても後悔しないと語ったことを告げている。煩惱愛欲にまみれた己れの作為をめぐっての、いいかえれば、己れの宿業をめぐっての親鸞の深い歎きがそこにある。

『歎行信証』方便化身土卷の私釈において、親鸞は、つぎのように述べている。

悲しきかな、垢障の凡愚、無際よりこ

のかた・・・出離しゅつりその期なし。みづから流転輪廻みじんこうをはかるに、微塵劫みじんこうを超過すれども・・・大信海だいしんかいに入りがたし。まことに傷しょうさ磋さすべく、深く悲歎すべし」

大意：悲しいことに、煩惱愛欲にまみれたわたしは、はるかな前生から現生に至るまで煩惱愛欲の境界を離れられなかった。自身の生死流転を思念するに、長大な時間がたったのに、未だに阿弥陀仏の誓願に出逢えずにいる。」

どのような善を作為することもできない身とは、善を作為しようとはがき、つとめても、思いどおりに作為できない力能の限度を己れが背負っていることである。作為に関わる己れの力能や資質は、現生における努力や思いだけではどうにもならない限度がある。

あるとき、親鸞はつぎのように語ったと唯円は伝えている。

「日常茶飯事の些末な煩惱愛欲の生活行為げんしやうでさえも、現生げんしやう以前の己れの生における生活行為の因果の連鎖の影を帯びていると知らなくてはなりません。凡常な衆生しゆじやうは、かならずしも思い、つとめるとおりに作為することのできる存在ではありません

ん。

親鸞はことばを継ぐ。

害せじとおもふとも、百人、千人を殺すこともあるべし。

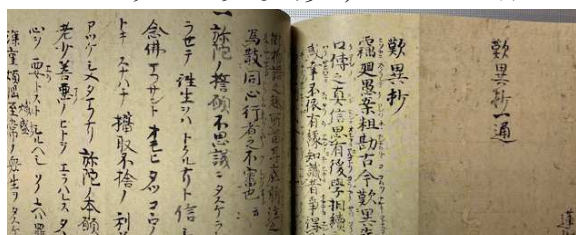
(「異義条々」第三条)

「そうであるから、唯円よ、そなたも、わたしも、殺すまいとは思っていても、百人、千人のひとを下ろすことがないではありません。」

これほどまでも深く、重く煩惱愛欲にまみれているわたしを救い、絶対知を体得させずにはおかぬ、という阿弥陀仏のあわれみ、悲しみは、なんと広大で、深いのでしょうか。

親鸞はつぎのように語る。

「凡常な衆生への、広大で、深いあわれみ、悲しみから作為された阿弥陀仏の誓願が真にして実であるならば、釈迦仏が阿弥陀仏の誓願をめぐって説かれ、伝えられたことが嘘いつまりであるはずがありません。釈迦仏の説かれたことが



真にして実であるならば、善導の註釈が嘘いつわりであるはずがありません。善導の註釈が真にして実であるならば、法然聖人のことばが嘘いつわりであるはずはありません。法然聖人のことばが真にして実であるならば、わたしの申すところもまた事実無根であろうはずがないでしょう。

（歎異抄」第二条）

阿弥陀仏の誓願が真にして実であるならば」ということには、阿弥陀仏の誓願を疑い、もしそうであるのならば、と仮定する意味は含まれていない。阿弥陀仏の誓願を疑うことは、阿弥陀仏の誓願をめぐって己れの知に基づいて確言することにほかならないからである。阿弥陀仏の誓願は、己れの知ではとらえられない「不思議」である。

親鸞は、『教行信証』行巻の私釈において、つぎのように述べている。

弘誓一乗海は無碍、無辺、最勝、深妙・・・の至徳を成就したまへり。何を以ての故に、誓願不可思議なるが故に」

大意…阿弥陀仏の誓願はあらゆる衆生を救いとる、限らない、もつともすぐれた、深くきめ細かなはたらきをなし遂げる。なにによってであるか。凡常な衆生の知では捉えられない不思議としての阿弥陀仏の絶対知によってである。）

阿弥陀仏の誓願が真にして実であるならば」とは、不思議としての阿弥陀仏の絶対知が真にして実であることを信じ、阿弥陀仏に身を委ねるといふ、一途な意志を告げることばである。

親鸞はことばをつづける。

「つきつめたところわたしの信はこのようなものです。

ですから、南無阿弥陀仏と称えることを信ずるにせよ、あるいは捨てることを信ずるにせよ、それは、あなたがたが一人の存在であることにおいて思念するところなのです。

末法の世の非僧非俗の念仏者であるわたしにとつて、南無阿弥陀仏と称えることは、阿弥陀仏の絶対知を信じ、阿弥陀仏に身を委ねることなのです。わたしは、あなたがたに南無阿弥陀仏を称えることを信ずべきであると説くことはできません。あなたがたが念仏者は、わたしの門弟なのではありません。それは現生の世俗の約束事にすぎません。煩惱愛欲にまみれたわたしの知は、阿弥陀仏の絶対知を捉えてはいないからです。

（歎異抄」第二条）

親鸞は、日頃つぎのように語っていたと唯円は伝えている。

「くり返し思念するに、阿弥陀仏の誓願は

わたし一人に向けられた誓願にほかなりません。はるかな前生以来の、解きたい因果の連鎖としての、通約できない存在であり、煩惱愛欲にまみれたわたしを救けようと思ひ立ち、五劫の長きにわたる思念と修行を重ねて、誓願を成就なされた阿弥陀仏のあわれみ、悲しみは、なんと広大で深いのでしょうか。

（歎異抄」第二条）

煩惱愛欲にまみれたわたしが、煩惱愛欲の深さ、重さのゆえに、なすすべを失い、懸崖に一人迫いやられたとき、阿弥陀仏は、誓願を介して、ひっそりとわたしの前に顕現する。阿弥陀仏は、通約できない存在であるところの一人としてのわたしに、あらゆる障碍を超えて、身近かに対している。

親鸞は、そう語るのがつねであったという。親鸞は、東国の門弟に向かつて、

「阿弥陀仏が誓願を介して対しているのは、はるかな前生以来の、解きたい因果の連鎖である煩惱愛欲にまみれ、なすすべもない存在であるところの、一人としてのあなたがたなのです。あなたがたは、一人の存在として阿弥陀仏に出逢うのです。出逢いをどのように受けとめるかは、一人の存在であるあなたがたの思念するところなのです。」（歎異抄」第二条）と語った。

稱讃寺 行事予定

二〇二二年 一月の行事予定

一日	金	元旦会	午前七時
三日	日	日曜礼拝	午前七時
六日	水	のんのん法話会	午後二時
一〇日	日	日曜礼拝	午前七時
六日	土	のんのん法話会	午後二時
七日	日	日曜礼拝	午前七時
一四日	日	日曜礼拝	午前七時
一六日	火	のんのん法話会	午後二時
三二日	日	日曜礼拝	午前七時 親鸞聖人を知ろう 午後二時

二〇二二年 二月の行事予定

六日	土	門信徒の集い	午後二時
七日	日	日曜礼拝	午前七時
一四日	日	日曜礼拝	午前七時
六日	火	のんのん法話会	午後二時
二二日	日	日曜礼拝	午前七時
二六日	金	のんのん法話会	午後二時
一八日	日	親鸞聖人を知ろう	午後二時

二〇二二年 三月の行事予定

六日	土	門信徒の集い	午後二時
七日	日	日曜礼拝	午前七時
一四日	日	日曜礼拝	午前七時
六日	火	のんのん法話会	午後二時
二二日	日	日曜礼拝	午前七時 春季彼岸会法要 午後二時
二六日	金	のんのん法話会	午後二時
一八日	日	親鸞聖人を知ろう	午後二時

編集後記

静かなお正月をお過ごしのことと存じあげます。
今春には、日本でもワクチン接種が始まり、オリンピック・パラリンピックも開催の方向であります。専門家の方からは、少なくとももう一年は、三密を避け、新しい生活様式で過ごしていただきたいと喚起されておられます。私は、この感染症が蔓延するまでは、減多にマスクなどせず、花粉症の方は、難儀だなあと感じておりました。また、外から帰ってきたら姉から「手を洗ったね、うがいをしなさい」と五十過ぎの私は言われていたのが、今では、外出には、一重にマスクして、帰宅後は、ちゃんと石鹸で指先まで洗い、うがいを欠かさない生活をしております。周囲では、クラスターも起こっている状況で、年末は鹿児島に車で甥っ子等三人で帰省する計画を立てておりました。帰省の十日ほど前にはPCR検査を受け、車の手配までしておりましたが、都知事の「帰省は控えてください」の報道に、考えた末帰省を断念し、近くに甥っ子が居るとはいえひと月を過ごしていることであります。昨年三月末から一人暮らしになり、思い立ったときぐらひは、家事をしている生活です。食事も料理らしいことはせず、ご飯を炊くぐらひで、惣菜は買って済ませることが多いです。毎日数回コンビニ通いをし、食べ残すことはないのですが、利便性に頼る生活に慣れすぎて自分はSDGs（持続可能な開発目標）の「環境である食品ロスの問題とは全く逆行の食生活をしている」と思います。報恩講に切り餅を四袋買ってお供物として飾り付けしたのですが、袋から取り出すと数時間で堅くび割れしました。参拝者の方にお裾分けするわけにもいかず勿体ないことばかりしております。人類滅亡をテーマとした映画には、感染症の次に食糧危機が訪れることが想定されております。成人病のこともあり、もっと真剣に食生活のことを考えなければと思いつつ、マクドに行く私です。

がつしょう

おお

合掌

多くのいのちに
生かされて

二〇二二年 心のともしび 「一月カレンダー」より